

27:27 それから、総督の兵士たちは、イエスを官邸の中に連れて行って、イエスの回りに全部隊を集めた。27:28 そして、イエスの着物を脱がせて、緋色の上着を着せた。27:29 それから、いばらで冠を編み、頭にかぶらせ、右手に葦を持たせた。そして、彼らはイエスの前にひざまずいて、からかって言った。「ユダヤ人の王さま。ばんざい。」27:30 また彼らはイエスにつばきをかけ、葦を取り上げてイエスの頭をたたいた。27:31 こんなふうには、イエスをからかったあげく、その着物を脱がせて、もとの着物を着せ、十字架につけるために連れ出した。27:32 そして、彼らが出て行くと、シモンというクレネ人を見つけたので、彼らは、この人にイエスの十字架を、むりやりに背負わせた。27:33 ゴルゴタという所(「どくろ」と言われている場所)に来てから、27:34 彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。27:35 こうして、イエスを十字架につけてから、彼らはいくじを引いて、イエスの着物を分け、27:36 そこにすわって、イエスの見張りをした。27:37 また、イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。27:38 そのとき、イエスといっしょに、ふたりの強盗が、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけられた。27:39 道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、27:40 言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」27:41 同じように、祭司長たちも律法学者、長老たちといっしょになって、イエスをあざけて言った。27:42 「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。27:43 彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」27:44 イエスといっしょに十字架につけられた強盗どもも、同じようにイエスをののしった。27:45 さて、十二時から、全地が暗くなって、三時まで続いた。27:46 三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。27:47 すると、それを聞いて、そこに立っていた人々のうち、ある人たちは、「この人はエリヤを呼んでいる」と言った。27:48 また、彼らのひとりがすぐ走って行って、海綿を取り、それに酸いぶどう酒を含ませて、葦の棒につけ、イエスに飲ませようとした。27:49 ほかの者たちは、「私たちはエリヤが助けに来るかどうかわかることとしよう」と言った。27:50 そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。27:51 すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。27:52 また、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生き返った。27:53 そして、イエスの復活の後に墓から出て来て、聖都に入って多くの人に現れた。27:54 百人隊長および彼といっしょにイエスの見張りをしていた人々は、地震やいろいろの出来事を見て、非常な恐れを感じ、「この方はまことに神の子であった」と言った。27:55 そこには、遠くからながめている女たちがたくさんいた。イエスに仕えてガリラヤからついて来た女たちであった。27:56 その中に、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、ゼベダイの子らの母がいた。

導入

今日は、マタイの福音書からイースターのメッセージを学ぶ第5回目です。

これまで4回のメッセージで、マタイが語るイースターの話に沿って学んできました。

マタイは、イエスの死までのあらゆる出来事を注意深く詳細に記しています。

マタイの福音書はユダヤ人を読み手と想定して書かれたものですので、広範囲にわたる内容となっています。

今日の聖書箇所はふたつにわけて考えることができます。

ひとつめは、十字架に架けられるイエスに対する人々の反応です。これは27-44節に記されています。

次に、十字架に関する神の解説です。これは、45-56節に記されています。

1. 十字架に架けられるイエスに対する人々の反応 (27-44 節)

マタイは、十字架に架けられるイエスに対する人々の否定的な反応を記録しています。最初にローマ兵です。

- a) **ローマ兵** — マタイは 27-37 節で、ローマ兵のイエスに対する扱いを記しています。27 節で、十字架刑の手配をするよう命じられたローマ兵たちが、公衆の面前でイエスをなぶることにしたことがわかります。彼らは、全部隊を集めて、彼らの卑劣な行為を見せました。ローマ兵の一部隊は約 6000 人ですから、ずいぶんたくさんの人が見世物を見に集められたわけです。そこには、イエスを裸にして、緋色の上着を着せたとあります。王族の上着の色に似たもので彼らが手に入れることができたものですから、おそらく彼ら自身の夜用の外套だったと思われます。兵士たちが冬の寒い晩に着る外套がありました。イエスは、「ユダヤ人の王だ」とおっしゃいました。兵士たちはそのことをあざけて、まず「王族の上着」を着せました。次に、いばらの冠を編んで、イエスの頭にかぶらせました。こんなことをすれば、もちろん頭は出血します。それは、カエサルが公式行事の際にかぶった冠を真似るためでした。それから、右手に葦を持たせました。葦は王族のしるしでした。これもまた、イエスがユダヤ人の王であるという主張をあざける目的でなされました。兵士たちはイエスをからかって、「ユダヤ人の王さま。ばんざい。」と叫びました。そして、イエスにつばをかけ、葦を取り上げて、それでイエスの頭を殴りました。こうしてさんざんからかった拳句、上着を脱がせて、もとの着物を着せました。見世物はこれで終わりです。おもしろがっていた兵士たちは、イエスを十字架につけようと連行しました。イエスを十字架につける場所に連れていく途中で、彼らはクレネ人のシモンという人を見つけて、イエスをかける十字架を無理やり担がせました。通常、十字架にかけられる本人が十字架を運ぶことになっていましたが、イエスは打ちたれ、殴られたので弱っていて、運べなかったのです。兵士たちは、苦みを混ぜたぶどう酒をイエスに飲ませようとしてしました。これは、痛みの緩和のために与えられるものではありません。十字架に釘打たれる時に動かないようにするためでした。イエスはそれを拒まれました。35 節には、兵士たちがイエスの着物をくじ引きで分けたとあります。この時には、イエスは全裸で十字架にかけられていました。イエスは、ローマ兵士からこれほどのひどい扱いを受けられました。このことから、私たちは何を学べるでしょう。

1. 神は、イエスにこのようなひどいことが起こるとあらかじめすべてご存じでした。
詩篇 22 篇を開きましょう。

詩篇 22:18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。

この出来事が起こる約 800 年前に、神はしもベダビデをとおして、イエスの十字架上の苦しみについて語られました。

詩篇 22 : 14-18

22:14 私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。 22:15 私の力は、土器のかけらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついてあります。あなたは私を死のちりの上に置かれます。 22:16 犬どもが私を取り囲み、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き

裂きました。22:17 私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。22:18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。

イエスが兵士たちからこのようなひどい目に遭わされると神が前もって知っておられるとわかっている、その苦しみが軽減されるわけではありません。

けれども、私たちの人生における苦難にも神がご計画を持っておられると教えられます。

そのご計画を神はちゃんとご存じで、ご自身のみこころのために許されるのです。

つまり、神はみこころによってもっと大きなことを成し遂げようとなさっているということです。

私たちにとって、そのみこころが成就するために、つらい経験が必要なのです。

罪の赦しや天国での住まいという祝福を私たちは望みますが、その祝福がもたらされたのは、神のみこころによって高い代価が支払われたおかげです。

その代価については後ほど詳しくお話ししましょう。

2. 兵士たちは、イエスがどういうお方であるか知りませんでした。

兵士たちは、イエスを十字架にかけようとして命じられたので、それについては選択の余地がありませんでしたが、イエスをからかったことは、彼らの職務を越えた行為です。

兵士たちは、イエスにひどい仕打ちをし、自らの悪意をさらしました。

歴史上の記録から、この兵士たちはユダヤ人の徴兵ではなかったことがわかっています。彼らはおそらくアラム語を話すシリア人だったと思われます。アラム語は当時のパレスチナでおもに会話や貿易で使われた言語です。

ですから、兵士たちはイエスのことをあまりよく知らなかったのでしょう。

いずれにせよ、ローマ兵たちの罪深さを神がご存じだったことは確かです。

神は、私たちの心の罪深さもご存じです。

私たちはクリスチャンになるまで、すべての罪は神に対して犯すものだという事実には気づきません。

詩篇 51 篇は、ダビデが姦淫を犯した後の悔い改めの祈りです。4 節でダビデは言います。

「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行いました。」

ダビデは、自らの罪がイエスにひどい仕打ちをした兵士たちと同罪であると認めました。

私たちが犯す罪は聖なる神を傷つけるということを理解するのはなかなかむずかしいのですが、これは神のみことばに記された真理です。

兵士たちは、イエスがどういうお方であるかよく知りませんでした。

イエスは神の御子です。人の姿をした神であります。

クリスチャンはこうであってははいけません。私たちはイエスを知っているからです。

ですから、私たちは罪に対してもっと敏感であるべきです。

イエスとの交わりが親しくなればなるほど、自らの罪深い性質がわかるようになります。

私たちの行いでイエスを苦しめることがないように、聖霊が助けてくださいますように。

- b) 通行人 (39-40 節) — 続いてマタイは、十字架にかかったイエスに対する他の人の反応も記しています。

マタイ 27:40 言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」

通行人はおそらく、過越しの祭りを祝いに来たユダヤ人の巡礼者が大半だったでしょう。過越しのころのエルサレムは大混雑しており、多くの人々は町の外か近隣の町に滞在しなければならぬほどでした。

この人たちはイエスのことを間違いなく知っていたはずで

す。イエスの奇跡について聞いたことがあるか、実際に見たことのある人たちです。また、イエスが教えられた時に、話を聞いたことがあるかもしれません。

イエスがろばに乗ってエルサレムに入られたとき、声援を送って出迎えた人たちの中にいたかもしれません。

この人たちは本当にきまぐれです。自分たちの必要を満たしてほしいと思ったときは、イエスのことをもっと知りたいと思いました。

けれども、このときはイエスに罵詈雑言を浴びせ、十字架から降りて神だと証明しろと言いました。

現代の世の中には、そのような人々ばかりです。

教会に来たことがあって、イエスを信じていると言ったことがあっても、今は「通行人」なのです。

教会にも行かなければ、イエスを信じているとも言いません。

イエスがその人たちの必要を満たしてくださらないからです。

ここで私が言えることは、イエスが来られたのは、私たちの罪の問題を解決するためだということです。

それがどういうことかはっきりと理解すれば、私たちはイエスの御前に身を低くし、罪の赦しを請い求めるでしょう。そうすれば、「通行人」になることは二度とありません。

イエスが救い主でいてくださり、イエスが救ってくださったことをずっと感謝したくなるはずで

- c) **祭司長、律法学者、長老 (41-43 節)** — この人たちは、当時の宗教指導者です。彼らも「通行人」と同じような反応でした。

マタイ 27 : 42-43

27:42 「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。

27:43 彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」

宗教指導者たちがイエスに対してこのようにふるまったのは非常に残念なことです。

しかし、彼らはイエスを追い詰めるために律法をいくつも破った人たちですから、予想に反しない反応です。

彼らは、偽証者まで用意して、違法で不当な裁判を画策しました。

イエスが十字架から降りてこられても、彼らは信じなかったでしょう。

宗教者たちは、神のご計画と目的に自らを合わせるのではなく、自分たちの計画や目的の枠にイエスをはめようとして

しました。彼らの神は宗教でした。そして、その「神」との関係は、イエスによる恵みではなく、規則に基づいた関係

- d) **強盗たちもイエスをののしった。(44 節)** —44 節には、イエスの隣で十字架に架けられた犯罪者もイエスをののしったとあります。

「強盗たち」と訳されたギリシャ語の単語は、頑なな犯罪者という意味です。

彼らは自分たちが多くの罪を犯したことをわかっていたはずで

す。それなのに、なぜイエスをののしろうと思ったのでしょうか。

その答えは、後にひとりの犯罪者がイエスを信じるようになった事実には隠されていると思います。

彼は、罪のない聖なるイエスの横で十字架にかけられ、自らの罪を示されました。

ルカ 23 : 39-43

23:39 十字架にかけられていた犯罪人のひとりにはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。 23:40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。 23:41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」 23:42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」 23:43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

人がイエスの聖さを目の当たりにすると、たいていはふたつの反応に分かれます。自分の罪が露わになるので怒って腹を立てる人と、罪を赦すというイエスの招きを喜んで受け入れる人です。

ふたりの犯罪者は、ここに挙げた対照的な反応のよい例でした。

では、メッセージの後半に入ります。イエスが実際に十字架にかかれたことに関する神の解説です。

2. 十字架に関する神の解説 (45-56 節)

十字架に関する解説として、マタイは数々の出来事を記録しています。

今日は時間の関係で、3つに注目しましょう。

1. 超自然的な暗闇 (45 節)

イエスがお生まれになった時、ベツレヘム周辺の空は、超自然的な光に包まれました。野にいた羊飼いたちは、主の栄光が回りを照らすのを見ました。(ルカ 2 : 9)

ヨハネは、イエスを人の光と呼びました。(ヨハネ 1 : 4)

イエスのご自身のことを「世の光」とおっしゃいました。(ヨハネ 8 : 12)

一方、イエスの十字架上の死にともなう最初の奇跡のしるしは、輝かしい光ではなく、恐ろしい暗闇でした。

ここには、昼の 12 時から午後 3 時までの 3 時間、まったくの暗闇になったとあります。聖書以外の歴史の記録によると、この暗闇は世界中に及ぶもので、イエスが十字架にかけられた地域に限定されたものではありませんでした。

この 3 時間、イエスによって 3 度のみ静寂が破られました。

一度目は、イエスが「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分ではわからないのです。」とおっしゃったときです。(ルカ 23 : 34)

次に、イエスの隣で十字架にかけられ、悔い改めた強盗に対しての言葉です。イエスはおっしゃいました。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」(ルカ 23 : 43)

最後に、ご自身の母親に向かってイエスはおっしゃいました。「女の方。そこに、あなたの息子がいます。」そしてヨハネには、「そこに、あなたの母がいます」と言われました。聖書には、このとき暗くなった理由や目的は明らかにされていませんが、旧約聖書でも新約聖書でも、神の裁きと暗闇は関連付けられています。

ヨエル 2 : 2-7

2:2 やみと、暗黒の日。雲と、暗やみの日。山々に広がる暁の光のように数多く強い民。このようなことは昔から起こったことがなく、これから後の代々の時代にも再び起こらない。 2:3 彼らの前では、火が焼き尽くし、彼らのうしろでは、炎がなめ尽くす。彼らの来る前には、この国はエデンの園のようであるが、彼らの去ったあとでは、荒れ果てた荒野となる。

これからのがれるものは一つもない。2:4 その有様は馬のようで、軍馬のように、駆け巡る。2:5 さながら戦車のきしるよう、彼らは山々の頂をとびはねる。それは刈り株を焼き尽くす火の炎の音のよう、戦いの備えをした強い民のようである。2:6 その前で国々の民はもだえ苦しみ、みな顔は青ざめる。2:7 それは勇士のように走り、戦士のように城壁をよじのぼる。それぞれ自分の道を進み、進路を乱さない。

アモス 5:20 ああ、まことに、【主】の日はやみであって、光ではない。暗やみであって、輝きではない。

ゼパニヤ 1 : 14-15

1:14 【主】の大いなる日は近い。それは近く、非常に早く来る。聞け。【主】の日を。勇士も激しく叫ぶ。1:15 その日は激しい怒りの日、苦難と苦悩の日、荒廃と滅亡の日、やみと暗黒の日、雲と暗やみの日、

イエスも、神の裁きについて「外の暗やみ」という言葉をよく使われました。（マタイ 8 : 12、22 : 13、25 : 30）

十字架は計り知れない神の裁きが下された場所です。この場所で、世の罪がすべて、罪のない完全な神の子に注がれました。ですから、神の裁きを私たちの目に見えるかたちで示すものとして、超自然的な暗闇はとても適切なものです。

イエスが全裸で十字架にかかっておられた間、イエスの神性が守られたと考える注解者もいます。

そうかもしれませんが、それがおもな理由ではないでしょう。

2. 神がイエスから離れられた。(46-49 節)

十字架上でイエスに起こった最悪のことは、神が離れられたことでしょう。

イエスはそのとき、神がお離れになったことをはっきりと自覚しておられました。

マタイは 46 節で、午後 3 時頃にイエスが大声で叫ばれたと語ります。

大声で叫ばれること自体が奇跡です。

イエスは十字架につけられる前に相当な暴行を受けられました。それから十字架にかかっておられるのですから、大声で叫ぶどころか話すこともほぼ不可能だったはずですが。

しかし、ここでイエスが叫ばれたことはとても重要なポイントであり、そこにいた人たちは皆、それを聞かなければなりませんでした。

イエスは、このように叫ばれました。

「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」

イエスは、詩篇 22 : 1 を引用しておられました。十字架の周りにいたユダヤ人にとって、親しみ深いことばです。

イエスは苦しみの中で叫ばれました。それは、永遠において初めてたった一度だけ、イエスが天の父なる神と引き離されたからです。

では、それはなぜでしょう。

答えは簡単です。

それは、そのとき、イエスが「罪」となられたからです。

パウロはコリント第二 5 : 21 でこのように語ります。「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。…」

預言者ハバククはハバクク 1 : 13 でこう語りました。「あなたの目はあまりきよくて、悪を見ず、…」

イエスが十字架にかかられたとき、神は背を向けられました。罪を見ることができなかったからです。

イザヤ 53 : 5 は、イエスが「私たちのそむきの罪のために刺し通され」と語ります。

ペテロ第一 3 : 18 は、イエスご自身が十字架上で私たちの罪をその身に負われたと語ります。

イエス・キリストが天の父に「見捨てられた」とき、それはイエスが神でなくなったとか三位一体から外れたということではありません。
天の父と常に持っていた愛情あふれる深い交わりが一旦断たれたということです。
神からの断絶の奥義は、成長したクリスチャンにとっても深遠で理解しがたい内容です。
神はこの真理を私たちに教えてくださいました。それは、すべての信徒に対するイエスの愛を私たちが少しでも理解し、受け入れるためです。
イエスは、私たちが最善を得るために、ご自身の身に起こり得る最悪のこゝろを受け入れてくださいました。

3. 神殿の幕がふたつに裂けた。(51節)

幕屋や神殿には聖所と至聖所を分ける幕があると、旧約聖書には記されています。
至聖所とは、神が人とともに住まわれることを象徴する場所でした。
罪深い人間は、この部屋に入ることも許されていませんでした。このふたつの部屋を分ける幕は 10cm もの厚さのあるものでした。
その長さは約 18 メートル、幅は約 9 メートルでした。
大祭司でさえ、「贖いの日」以外に至聖所に入ることは許されませんでした。

ヘブル 9:7 第二の幕屋には、大祭司だけが年に一度だけ入ります。そのとき、血を携えずに入るようなことはありません。その血は、自分のために、また、民が知らずに犯した罪のためにささげるものです。

レビ 16:2 【主】はモーセに仰せられた。「あなたの兄アロンに告げよ。かつてな時に垂れ幕の内側の聖所に入って、箱の上の『贖いのふた』の前に行ってはならない、死ぬことのないためである。わたしが『贖いのふた』の上の雲の中に現れるからである。

贖いの日にいけにえをささげるのは年に一度の儀式で、人間が聖なる神の目から罪を覆われなければならないことを思い起こさせるものでした。
この奇跡はとても重要なので、しっかり理解する必要があります。
聖書は、私たち人間がこの世に罪深い性質を持って生まれると教えます。罪のせいで、私たちは神から引き離されており、神のご臨在の中に出ることができません。
私たちの罪が、神と私たちを引き離しているのです。
神の奇跡によって幕がふたつに裂けたことは、ふたつのことを意味します。

- a) イエスの身体が私たちのためにささげられた。
- b) イエスの死によって、神と人との間の壁が取り去られた。

イエスが死なれたのは、私たちが罪赦され、神のご臨在の中に入り、神とともに永遠に生きるためです。
イエスの十字架上の死がなければ、私たちは神のご臨在の中に入ることはできません。
罪が人類と聖なる神を隔てる壁になるからです。
しかし、イエスが罪のために死なれたことを信じるなら、その壁が取り去られ、永遠に神のご臨在を享受することができます。
多くの人にとって、聖なる神と自分たちを引き離しているのは自らの罪であるという事実を受け入れるのは難しいようです。
ほとんどの人は、他の人と比較して、自分を判断しようとするからです。
自分は他の人よりましだと考えたいのです。
けれども、100%聖なる神に照らして自分を判断することはしません。
もしそうすれば、自分の罪深さに気づかざるを得ないからです。
クリスチャンでない人にとっての課題は、自分の目ではなく、神の目から見て、自らに罪があることを理解することです。

罪を示されたなら、赦しを受けたいと思うようになるでしょう。赦しを与えることがおできになるのは、唯一イエスだけです。

今日の個所をよくわかっていただけたことを願います。

今日お話したこと以外にも、あらゆることが起きました。

とくに、52-53 節は大切な出来事です。

そこには、イエスが死なれてから墓が開いて、イエスが復活された後、死んでいた人たちがよみがえったとあります。

復活については、来週お話しします。